

2016（平成28）年度 東京大学 入試問題 第4問（文系） 解答例

- 一 予知や予報の介在は、予感と時差なく天候が崩れる異変という非日常の体験と、その後何かが生起する期待感を奪うから。
- * 「予感とほとんど時差のないひとつの体験」が「一瞬の、ありがたい合わせ」だからである。また、筆者はそれを「日々の延長のなかでとらえてみよう」としているので、「予知や予報を介在させ」ては、意味がなくなる。
- 二 青は、遠目には青く見えるが、近づくと幻として消失し、また、日常に似て、平凡で穏やかに見えるが、運動を示し続けているところ。
- * 海であれ空であれ、青は、遠目には青いのに、近づくと幻となる。加えて、平凡で穏かなのに、「弾かれつづける青の粒の運動」（散乱）をしている。この二点の逆説性の指摘が「不思議な」ところの説明という設問要求に応えた内容である。そのうえで、字数として可能であれば、「幻を重い現実に変える」「日常に似ている」ことを添える。「海」の「不思議」ではないので注意したい。
- 三 単調な日常を単調なまま過ごすのに必要な暴発的な衝動は、心の内で静かに処され、外面上は平静が保たれているということ。
- * 指示対象の内容要約であるが、やや長く比喩的な箇所を、短く一般的表現に改めるという点では、やや難しいであろう。
- * 「裏面のある日常」であるから、指示対象の「しかしその暴発は～」を踏まえて、「日常は、裏では～だが、表は……であるということ」という構文で解答をまとめる。
- 四 青空の急激な変化で内心の暴発を解消し、体験の質を高めようとする期待は、風船の赤に心奪われ、簡単に失われたということ。
- * 「空の青」が急激に変化し、それに応じて「体験の質を高め」ることができ、自己が変貌していくはずが、下降する「風船の赤」へと引き付けられ、「天を目指さない」で「地上へと引き戻される」ことになる。
- * これは、青による天への昇華を許されない、世俗に留まる赤裸々な自己の象徴であろう。